
ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」番外 「驚愕」

y

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」番外「驚愕」

【ZPDF】

Z0760G

【作者名】

y

【あらすじ】

ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」本編(<http://nocode.syosetu.com/n4852d/>)
番外。キャンサー・G(豪)が初めて光を店で見た一年前。それは、過去亡くした最愛の妹が成長した理想そのままの姿だった。妹を想い彼は・・・

(前書き)

?表サイトの本編はこちになります

http://syosetu.com/pc/main.php
?m=w1-4&ncode=N4852D

?続編になります（18歳未満閲覧禁止）

http://syosetu.com/usernovelma
nage/top/ncode/39346/

――そんなバカな

あの子がいる
お兄ちゃんと無心に俺にすがり付いてきた大切な存在
凍つた冷たい世界で無残な姿で死んでしまった筈の存在
それが成長して、俺の前にいる
そんなバカな

生きていたのか

> i 2 2 6 1 — 3 2 2 <

「豪、今週末店来るだろ？」
「・・・あ？ あー新しく入った女共連れて行こーとは思つてるが何
だよいきなり？」

「そりやあのクソくだらねえ法律の対応策の件を話す為に決まって
んだろうが？ どーよネオ池袋？ 結構締め付け強くなつてんだろ」

「そーだな、北口のホテル街なんかはもうダメだな・・・ 露西亞女
は排除されて中国系ばつかになつてるが・・・ こっちの西口も時間
の問題だ」

「ネオ新宿もひでえモンだ――でな、俺さ路線変更しようと思つ
てんだ。最近入つた子でな・・まだ若エが、かなりイイもん持つて
つから店の顔として売り込もうと思つてんだよ。余り俺好みじゃね
え大人しい子だが今の時代に合わせた方向つてモンにしようと思つ
てな・・・で、お前に太客になつて欲しいんだよ。ま、箔付けつ

つーか・・・お前が後盾になってくれりやあＺＯ・一は確定するしな

「はあ？お前の店のＺＯ・一はあのアフロさんだろーが。ずっとそうだつたじゃねえかよ」

「いや実質アレでいいんだが・・・プロ過ぎるんだ。ちょっと法律の影響が収まるまで素人っぽいのを前面に出してメディア露出も多くしようと思つてんだよ」

「・・・お前らしくねえな。まあ仕方ねえか、背に腹は変えられねえもんなあ・・・まあいい、店で話そづぜ。指定する位別に構わねえよーーー」

「きつと氣に入るぜお前。そっちの氣はねHことは知つてるが、まあ素直で偉いこと美少年だしなーーじやあそん時な、また」

そんな風に「Yamato-nadeshiko」オーナーから電話を貰い訪れた——淡い色の髪を持つた細身のホストがオーナーに連れられてテーブルに来た
——俺は固まつた

シャワーを浴び、ソファに座つた。下着だけを身につけた女がブランデーを差し出してきたのでそれを一気に煽る

「ボス？ ビーシタの？ 怖い力オしてるネ・・・」

ネオ池袋の夜景が女の白い頬に映る。酒をまた作らせ、差し出してきた女の長い髪を掴み自らに押し付けると女の舌がそれに絡み付いてくる

「・・・もつと奥まで咥える」

そつ命じながら酒をまた一気に煽つた。女の長い金髪が動く

「・・・あり得ねえ・・・」

思わず呟いた俺の言葉に女の「？」という視線が届くが頭を掴んで

押し付ける——黙つて座えてりやいいんだ
生きていたのか？

そんなバカな

あの子の葬儀

小さな棺に入った、余りにも硬く強張った体
余りにも白かつた 顔

蝶人形のようだつた

お兄ちゃんと明るく発していた唇は閉じられ
唇の周囲は皺が寄り 引かれた紅は赤く

俺を真つ直ぐに見上げてきた瞳は永遠に閉じられて

いつまでもその頬に顔を擦り付けて泣く俺は引き剥がされ

燃やされ 黒い煙が小雨の降る空に昇つて行き お前の中身は四
散した

固形になり 何人の人々にお前のからっぽになつた残骸が分けら
れ

粉になり 形すら無くなつたお前 白く灰色な粉だけが残された
それをただ掴み空に向かつて咆哮する——指の間からさらさらと
零れていく——

俺はいつまでも動けなかつた

「は、初めましてキャンサー・G様！本日は御来店誠にありがとう
ございます！」

緊張しているのだろうか、少々のどもりが初々しい印象を与える田
の前の美少年。淡い色の肩までの髪、深い海のように蒼く澄んだ大
きな瞳、華奢な体、明るく清潔とした高い声——

「おーう豪ぢやんびりの子へ可愛いだろ? なああ~」
にしてやつてくれや」

オーナーはいらねえよ。とつとと事務所に戻りやがれ、ウザHんだよ
「あの・・・お隣に座つても宜しいですか?」

ああ、座つてくれ。もつとよく見せてくれ——お前だろ? お前な
んだろう?

「なあ豪。女達ちょっと貸してくれねえか? ステージ華やかにして
えからよ?」

勝手に持つてけ——とにかくこの子と話せり

「お酒作りますね」

テーブルの酒に手を向け——先細りの白い手。淡い髪の柔らかい
匂いが鼻をくすぐつた

「どうぞ——私も何か頂いても宜しいですか?」

何でも呑んでくれ、好きなモン頼めよ——何でも欲しいモン言え
よ。俺はずつとそうしたかつたんだよ

「キヤンサー・G様はネオ池袋の顔役の方だつて伺いました。私
たいな新人をテーブルに呼んで下さつてありがとうござります。私
的な衣装を全部引き受けたつて聞いた時驚きました

いい——社交辞令はいいんだよ。まあ客商売だから仕方ねえが・・・
・そんなことじゃない、お前に言つて欲しい言葉は

「お忙しいのに——」

小さな顔を上げ、俺を見た

「来て下さつて、嬉しいです!」

お兄ちゃん來てくれたの? 嬉しい!

「ああ———いつだつてお前が望めば・・・何があつたつて会いに
来るよ」

女をソファに押し付け、自分を埋める。獣のような声を上げる金髪——違う、こんな色の髪じゃねえ。もっと淡い色で、柔らかい匂いがして——こんな香水の毒々しい匂いじゃない。あの子そのもののような清廉で優しい、匂い

「・・ボ・・ス、どうシタの? - - - イツモヒ・・・違うコ——そんなんに・・乱暴に——」

黙つてゐる。声を出すんじゃねえよ。あの子の声はそんな堕落した声じゃねえ。もっと澄んでいて清らかな

「 - - - 生きて・・・いたんだ・・・」

女の肉に刺激を作りながらただ自動的にそれを動かす。とにかくこの何だか分からねえ衝動を吐き出すしかねえんだ。そうしなきやどこに向けられるか分からねえ——あの子に向けることだけは避けなければ、回避しなければ、決して気付かれないように、一度と喪失はない為に

あの棺からお前は生き返つて

いや、悪夢だつたんだ。現実だつたとしてもあれは別人でどこか俺の知らない所でお前は真つ直ぐに育つてきつと幸せだつたんだ。だからこそあんなにも美しく、可愛らしく、清楚に

俺の事は忘れちまつたのか? そつだよなまだ6歳だつたもんな少しずつ思い出せよ。待つてるから

俺のことを思い出して——あの施設に会いに行つた時のよつこ「お兄ちゃん」つて言つて抱きついてこいよ

今俺ならお前を守れる。何だつて望みは叶えてやれる——あの頃の無力なガキじゃねえから

俺の妹は生きていた。そして何の偶然か——俺の前に現れた

女の腹にブチまけて——シャワーを浴びさせて帰らせた。一人に

なりてエ

「 - - - 美麗に、なつたんだな・・・」
テーブルサイドの棚から一枚の写真を取り出す。もつセピア色に色褪せてしまつた、皺が幾つもついているボロボロの古い写真。復元する気にはならなかつた。あの子はこの写真を本当に嬉しそうに首にかけたおもちゃの財布に入れていたから。あの子のぬくもりが残つてゐる筈だから

「 本当にーーー 美麗だ」

中学の学生服を着た俺とーーー妹が施設の門を背景に笑顔で映つてゐる。施設の保育士が撮つてくれたたつた一枚残つた写真。お前があの悪夢の土手で横たわつていた時もこれは首の財布に入つていてーーー財布の紐で首を絞められたお前

「 幸せか? 何で夜の世界にいる? そんなことするなよ・・・俺の所に来いよ。大切に大切にしてやるからよ・・・一緒に住もうつて言つたらいつも喜んでくれたじやねえか・・・」

写真の幼いお前に話しかける。あのクラブで会つた美しく成長したお前に話しかける。頭に浮かぶのはただあの美しい笑顔だけだ。何の作為も無い、穢れていな、太陽のような瀧瀧とした笑顔ーーー先程女を抱いていた時にそれが重なつた

「 ・・・ [冗談じやねえつつの・・・]

妹なんだ。ンな事考へてる訳ねえだろーーー 男の汚エ欲望でまた怖い思いをさせる気かよーーー [冗談じやねえ!]

お兄ちゃん、おかえり! ごはんもうすぐ出来るから先にお風呂に入つててね

カウンターキッチンに目を向けるとーーー あの綺麗な存在がいた。料理を作りながら俺を振り向いている

美味しい? え? 味濃いかな・・? ごめん初めて挑戦したお料理だつたから・・・ 次は頑張るから・・・ 食べてくれる?

リビングテーブルに目を向けるとーーー 座つていて、上目遣いで俺

を見ている

今度のお休みドライブに連れて行つてくれるの?ホント?嬉しい
!私お弁当張り切つて作るね!

ソファに座る俺の下、お前は床に膝をついて笑つている——嬉し
そうに、俺の膝に手を添え見上げてくる

「ああ・・・何処でも連れて行つてやるからな。お前の弁当楽しみ
だよ・・・」

幻ということは分かつていて。クスリは女をやる前に少し鼻に含ん
だが———ンなモンとつぐに切れてる。俺は普通に幻覚を見てるよ
うだ。幻聴まで聴こえるよ。ラリつてんのか?狂つちまつてんのか?

「何でも——叶えてやるよ。お前が望むことならば

狂つている俺はその幻覚の頬に手を添えた。?といつ表情に変化し
た幻の顔を引き上げ屈み——接吻をする

お兄ちゃん・・・

都合のいい幻の存在は頬にある俺の手に、白い小さな手を添えて微
笑む。僅かに頬を朱に染めて、恥ずかしがるように視線を逸らす
だめ・・・

視線を逸らすその可憐な仕草に俺は煽られた。その身を抱え上げソ
ファに横たわらせ——首筋に顔を埋める。柔らかく甘い匂いだ。
さつき吐き出しだらうが——どうしようもなく衝動が湧き上がる。
折れそうに華奢な体に触れてしまう——女の体。お前は女だ。
分かつてている——6歳の頃の直線的な体じゃない。柔らかい曲線
を持った、男を受け入れる優しい体

「——て、いる」

それは言つてはいけない言葉だ。幾ら狂つてようと分かつていて
——硬く強張るお前の体をゆつくりと柔らかく解し押し広げ——
女を抱くのにこんなに必死になるのはいつ振りだ?——細心の注
意を払つて、反応を見ながら俺を埋める。先程の汚エ女なんかとは
正反対のお前の内

だいすき・・・おにいちゃん・・・

不快に手にこびりついた白いものを手近な布で拭く。未だそれは溢れ、さつさと止まれと布で強く抑えた——

「・・・何やつてんだよ・・俺ア・・・」

激しい自己嫌悪に陥る。女を抱いた後でもあの綺麗な存在を夢想して自慰をしていたのだ。覚えたてのガキじやあるまいし・・・バカか、俺は

「・・・あ～なつさけねえ・・・」

写真は無意識に裏返しにしていた——見られたくなかった

「やつべえ、なーーー嵌つちまつたんか俺は・・・あんのオーナーのヤロー・・・何もかも計算通りつてワケか・・・」

もう一度シャワーを浴びる為に立ち上がる。大丈夫だ。決して気付かれない。俺はお前をそんな対象に見ることはしない——絶対に気付かれないように

大切な存在だ

やつと目の前に現れた

手に入れることが出来るだろうか?

もう一人の後盾の存在は分かつた

様子を伺うようにテーブルに来た、NO・1の偉丈夫な男
ただのホストではない。分かつている。あの男は手強い
お前と視線を交し合う様を見て、理解したよ

——邪魔だ

もつと早く出会っていたら

いや、離れ離れにならなければ
ずっと俺と共にいてくれたならば

いや

大丈夫だ。軌道修正は効く筈だ。きっと

諦めてたまるかよ

絶対に諦めない

お前を手に入れるまでは
決して気付かれないように

笑顔を曇らせることのないよう

俺を信用させて

安心させて

どんなに時間が掛かるうが

お前は自分から望んで俺の元へ来をせしめる

幻を現実にしてやる

俺のものに

その時こそ 言おう

言つことが赦されるだらつ

愛していふ と

(後書き)

読んでくださいありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0760g/>

ホストクラブ「Yamato-nadeshiko」番外 「驚愕」

2010年10月28日05時33分発行